雪

高祖保

青空文庫

目次

鶯　19
孤※わけ入る山　19

Sine qua non

乖離（くわいり）

一

十月。秋神の即位。――金鶫（みそさざい）一羽、廃園のエルムの樹に通ひはじめる。

二

道傍の亜灌木にある、水禽の糞。
湖からあがる風が、弧を描いて、水霜の葉におちる。
青い鶫（つぐみ）が食卓にのぼりだすと、聖餐式のやうに澄んだ夜ごとが、展（ひら）ける…

三

手帖に一篇　天使園の薔薇　といふ詩を、書きとつた。それから、パピィニの自叙伝を読んだ。そして、ひとりで眠つた。

「灰色の靴下を穿(は)いた秋」が、わたしの精神の罅裂(ひび)の隙き間から、潜(もぐ)りこんでくる。

四

霊感の屯(たむろ)。——たましひの寨(とりで)。

五

福音書的(エヴァンヂェリック)とは、何といふことであらう。

海扇貝(いたや)にみえる、支那団扇。

かれが年老いたアナクレオンのやうに、雨にうたれながら詩を吐き出す、——吐き出すことそれは、一向エヴァンヂェリックではない。

六

弗羅曼（フラマン）とよばれる、割烹店（レストラン）の中二階。孔雀草の群落。
わたしは水馬歯（みづはこべ）を刻んで、それへ該里（シェリイ）の酒を滴らせる。秋ばかりは、金いろの時間が、燠（おき）のやうに燻（いぶ）つて。…

みづうみ

ほととぎす啼や湖水のさゞ濁り　丈艸

私は湖をながめてゐた
湖からあげる微風に靠（もた）れて　湖鳥（うみ）が一羽
岸へと波を手繰りよせてゐるのを　ながめてゐた
澄んだ湖の表情がさつと曇つた
湖のうへ　おどけた驟雨（スコール）がたたずまひをしてゐる
そのなかで　どこかで　湖鳥が啼いた

私はいく夜(よ)さも睡れずにゐた
書きつぶし書きつぶしした紙きれは
微風の媒介(つて)で　ひとつひとつ湖にたべさせていつた
湖　いな

貪婪な天の食指を追ひたてて
そして結句　手にのこつたものはなんにもない
白けた肉体の一部
それから　うすく疲れた回教経典(コオラン)の一帙

刻刻に暁がふくらんでくる
湖どりが啼き
窓の外に湖がある
窓のうちに卓子(テーブル)がある
卓子のめぐり　白い思考の紙くづが堆く死んでゐる
ひと夜さの空しいにんげんの足掻きが　のたうつてそこに死んでゐる！
この夥しい思考の屍を葬らう

窓を展いて　澄んだ湖のなかへと

Sine qua non

そなたの睡眠(ねむり)は、夜つぴて白く窓を埋(う)める
片脚あげた　噴き上げの鶴よ。

わたしは読み飽いた「聖ヨハネ祭の夜」の頁をたたみこんで、暗い一閑張(いっかんばり)の下に、さて閉ぢようとして気づいた。
その夜、なにせ、季節は冬から孟春に、とび超えようといふのだ。（くらい天の一方で、間(ま)遠(どほ)に神々の跫音がゆききする――）

わたしの中のわたしが、しばし恍惚(うっとり)とじぶんを置きわすれて、往ってしまふ。まづ、それをとり戻さなければならん。
窺きガラスのなか、東方(ひんがし)が白む頃あひといふに、欹てる耳のうへで逸はやく、
――Chio, chio, chio, chio-chinks

chio, chio, chio-chinks …

暁は迅い。窓はまだ睡りたりないのだ。
わたしもまた睡りたりん。
歌ごゑは、蝋燭ほどの月あかりの下びに。灌木のしげみのあちら側に。
どこか「夜啼鶯」とでもいひたいが、——湖どりと覚しいそのこゑは囁きつゞける。張りのある、わかい調子で。
（ひょいとヒマラヤ杉を、湖かぜが煽ってとほる。ひそひそ噺のかたちで。…）

嚔　ひとつ
ふいに、
わたしの前にゐた暁ちかい夜が、ぐつたり息絶える。
なんといふ　いい夜！
わたしの中のわたしが呟く
——Sine qua non と。

哀訴

旅館寒燈独不眠　高適

天の河を斜(はす)に抱いて
旅館の門燈のあたりだけ
淡く　仄(ほの)り闌(た)けてゐるやうだ。

（いつたい、どこへ宿れといふのだらう?）

わたしはその下にゐんで
せつせと書き綴る、
――あんのんな夜分(やぶん)のふしどだけは
どうにか　神さま!
お与へください　といふ尺牘(てがみ)を。…

山下町の夜

「灰夜（グレイ）一枚でおりてくる冬！」と書いた
「後（うしろ）から足ばやに、私を追ひ越すゆふぐれ」とも書いた
その冬のゆふぐれが
ぽつぽつ、街燈に燻（くす）んだ灯（あかし）をいれてゐる
――横浜　山下町の、ここから海が展（ひら）けるところ…

たつた一つ、――ごらん、外国商館の屋上の、幽婉な抛物線（パラボラ）が昏れのこつてゐる。（ゆふぐれよ、あれはお前がけふの忘れものだ）夜ぞらをくつきり劃つてゐる明暗。
その涼しやかなスカイ・ライン。――まだ早い夜の、まだ星かげうすい空…

碇泊した Empress of Asia が
海へ明るい点灯装飾（イルミネーション）の灯をおとしてゐる
（そのあたりだけ、海が燃えてゐる）
赤い土耳古帽のせた　ひよろながい印度人の火夫が
烟艸（たばこ）を薫ゆらせてとほる
その後から、青い星を散らす電車のポオル。

わたしは歩み入る、街路樹の鈴懸（プラタナス）を涵してゐる闇へ。それはSといふ外国商館のまへで、注文帳（オオダアブック）の黒の背革よりもくろい。闇に紛れてわたしはみる、二輪車のいくつかが、闇なかに憩（やす）んでゐるのを。——いまや夜が、それを平和な睡眠（ねむり）のなかへ裏（つつ）まうとするとき、そのどれもが、円（つぶ）ら瞳（め）に肖た灯を点けたまんま…

公園の噴水（ふきあげ）。（孤燈のかげに
夜の鶴をわたしは象（かたど）どる
天から堕ちた純白のマダム・シゴオニュの扇）

ゆふあかりの青黛が仄のり匂ふ。あの自転車置場に、囁き交してゐる地上の参星（オリオン）。いみじい、だが、草かげの鬼灯ほどしかない、これらの星たち！

弾く人のゐない夜

弾（ひ）く人はゐない。

室は冷かに、澄んでゐる。動かぬ。

動くものが欲しい。
ただひとつ、動くものがゐる。あそこに…
ピアノの胸のあたりで、夜は頭をふつてゐるメトロノオム、
おまへの微韻だけが、そつと夜をゆさぶる。

睡つてゐる透明な霊衣、
百虫譜、
白体の蛾、
わたしは憩へるやうに、眠りからたちあがる。

なにものかの声が囁く。
「――なにせ、秋だ、聖壇の大蝋燭のやうに、ちらちら、感情の膜が耀ひながら微動する」と

花が崩れ、水晶の時計に肖た秋が
かうべの後ろ側で澄んでゐる。

雪もよい

寒い。

わかい歯科医のもとへ　一句
「歯石(しせき)はづす　夜の皓(しろ)さに
睫毛鳴る」とかき送つて
その夜、まつしろいものに埋(うま)つて寝た。

寒い。

青い視野の奥のはうで
鵞ペンは、わたしの鵞ペンは寝たやうだ
行燈(あんどん)まがひの卓上電気(スタンド)も　もはや　眠つたらしい
それから　わたしの子供も　句帖も。

ところで
のこつた、眠らないのがただひとつ
膨らんで阿呆のやうな、きたならしい、このひだりの胸の哀求律。

寒い。

夜のからんからんに乾いた空気の、その底で
うつかり　咳をとりおとすと
発止！
それは青く火を発して　鳴つた。

雪

雪は紋をつくる。皷の、あふぎの、羊歯の紋。
六花。十二花。砲弾の紋。

江州ひこね。ひこね桜馬場。さくらの並木。

すつぽり、雪ごもりの街区。

星のうごかぬ、八面玲瓏と煙り澄んだ、銀張りの夜。

早寝の牀で聴いてゐる。……プラステイツクな宇宙のしはぶきを。（このとき、地球は鞠ほどの大きさしかない）

微睡の睫毛はみてゐる。……囲炉裏に白くなつた燠を。（それが、宛らわたしの白骨、焼かれた残んの骨に似る）

燠に化つた楷の呟き。——わたしの脊椎を外しとつてする「洗骨式」を、……でなければ、肉体の髄を焙きつくしてする「風葬祭」を、……そんな末枯れた夢見もするわな。

老来（おいらく）の、炬燵に眠りたまへる母上よ。
あなたの鬢（びん）にも、雪がある。

てがるな緑化季

六月です
ちちははよ
窓したの疎林で、郭公鳥が啼いてゐる。

夜間中学の副読本（サイド・リイダア）なんかの詩で
よく邂逅（であ）ふ、——CUCKOOといふ禽、
（あのこゑは　いまや初夏のひかりを浴びる）
わたしは截る　淡茶いろの竹針
それに
一円半のCUCKOO WALTZを唄はせよう。

あの
葉緑素のかつぱつな軽井澤では
へんに
ひとは白つぽく
時間はかたむいて　明るい…
（リルケが歌つたやうに）

てがるな緑化季ですね
ちちははよ
はて
わが胸の枝々で　郭公鳥が啼いてゐる。

つばくろ

雨……

門を暗くして、ひとは潜る。昆虫はゆき、またかへる。門を暗くして紛れ込む両伯のたぐひ。
——このグリィンを濡らした、微粒の賊！

ことし首夏。まだわかい燕のつがひが巣くつた門。
ひもじい愁ひをば霊台に薫じて、門を潜り、ひもじい愛慾の層をば、身うちにかき濁して、グリィンにしぶく雨に濡れて出る。

雨……

美しく蓑と傘とを棄てた。
晴ればれと、かへる燕。雨のなかに、汚れた道がけぶり、道の見付に、亭い門。その門を凌ぐ一双の菩提樹（リンデン）。いな、身の薄いひもじさに悶えながらに、ひとがをり、そのひとの後ろのグリィンに、やはり、門を暗くする雨が煙（けぶ）る。

雨……

門を翔けぬける、一羽の燕の、飜転。その姿は緑海（りょくかい）に消える。（わたしも飛び込まう。燕よ。
とめだてしないでおくれ。あのさむく黝んだ葉緑の海の、ただなかへ！）

鶯

去年（こぞ）の雪いづこ
かの夜半（よは）の
ねざめに　あをき　窓玻璃（はり）に
散りこし粉雪（こゆき）
いづち　ゆきけむ

茅蜩記

一

比叡のなだりをくだり、うぐひすぶえとまをすものききはべりしか。いまだくわぶんにしてひぐらしぶえ、耳にいたせしことこれなくそろ。短日幽居のなぐさに、さればひとこゑ、きかまほしくとはぞんじそろ。

二

偶来松樹下　高枕石頭眠
山中無暦日　寒尽不知年

大歳の暮れのひそまり、それは草臥れた心をたてかけるためにいい。「山中無暦日」といふ詩句、そのなかに、わたしは栖んでゐる。山中の温泉（いでゆ）。湯はあふれ滾れて、あけくれわたしの孤独を暖め、……

いましがた、湯殿への渡廊下で、わたしは一片、白いものに触れた。雪をのせた濶葉樹の落葉でないとすれば、匂ひをたたんだ、銀木犀の花びらの一片にちかい。外の雪あかりにすかし

てみると、大晦日の三十一と書かれた亜剌比亜数字が、顫へるやうに、その白さを汚してゐた。ふつと思ひかへしてみると、もうこの歳も暮れるにちかいことが、まざまざと甦つた。山中無暦日。——暦日のない旦暮に、遽かに標立つものの白さが、身に沁みてきた。

湯に涵つて目を瞑つてみると、その暦の白いおもてを、気ぜはしく、年のうちすぎる跫音が、聴きとれる思ひがする。——内湯におちる湯の音。——玻璃にさらさらと肌ふれて、闇に沈んでゆく、塩のやうな粉雪。耳をすますと、裏山を越える木枯のかぜの一枚が、颯と幅ひろに、けものの吼えるに肖た叫びを、おろしてきた。庭樹が鳴る。小禽の凍えるやうな音もそれに交る。そのなかから、ひと色、かなかなかな、——茅蜩のこゑ。……真冬の雪の夜に、はてな、それは雪を透して、脳の芯に、錐もみをいれるほどにつんと澄んで鳴る。かなかなかなと、高く冴えて、とほく、淡く尾をひく。「ちちよははよかなかな鳴くよ日のいりの亭き木ぬれにひとつ鳴き澄む」——じぶんの書いた歌が、そのこゑの下から、急に泛んだ。つづけざまに、またひとつ。……「かなかなは鳴きのうつりに日のいりの合歓の木かげのベゴニアの花」

そのこゑが、はたと途絶えると、遽かに落湯の音。木枯のざわめき。身をかへして、わたしは一度ひらいた眼を、また瞑る。……

野

蟋蟀堂にあり、歳聿にそれ莫れぬ　国風

――あれだ。

ドオデエも「風車小屋だより」のなかにかいておいた、あの蝗の大群。……こいつは、まつたくあれに似た凄じさだ。天日を陰くして薨々とむらがり飛ぶ、斯螽。索々と鳴る、その翅音。耿々とひかりうすれる、落日。さうだ、そのなかをとぶ神杖。酒袋。あゝコップ。

一天の景は、寒く、こころを憑り聿つて、歎きの科を強ひる。――わたしはその群る虫に、その虫の歌に、汎として泛き流れるサモス派の船である。…

鶯

夜更け。

暖炉のめぐりの、あのあかるい温気。

けきよ、けきよ、けきよ、けきよ。その温気のなかを、籠から、鶯が啼く…

すこし酸味のかつた終電車の軋り。外では白い微粉が片明りして、軒のあかしを朧ろに、それが、なにか十二月だといふ身についた落ちつきで、磨いてゐる。——なにかを、鎧扉に囁きながら。

暖炉のうへの硝子時計。

壁の一角に磔刑られて、そのまんま年老いたマリイ・マグダレン。そして、その肩さきの、雪。

けきよ、けきよ。……鶯の啼くこと、ふたこゑばかり。恍惚となる閑けさ。——聖母像はゐない。架上の基督だけが、弱々しげに咳き込む。　けふは、あなた、クリスマス・イヴなんですよ　紅茶のスプンの「ちん」と鳴る音。——

澱んでゐた夜が、その音に思ひついて、せつせと闌けてゆく。風信子のあさい欠伸。

けきよ、けきよ、けきよ、けきよ。

鈴懸並木のあちら側では、雪の道を拾ひあるきに、——鶯の口倣ねしながら、それ、誰かがあるいてゆく…

すでに年が老けて…

まくらの草子に出る　蓑虫よりは見窄らしい
あの蝦と蜘蛛の混血児みたいなやつさ
もう流しもとの暗闇で
――つづれさせ　ころもさせ
おっつけ秋もをはりだと　あいつがわたしに告げる

白秋は砂糖のこなが眼に沁むと、歌つた
あの夜ふけの灯の下
ひよっこり　蹇の促織が罷ん出て
――ちりり　ちりり
糸のすり切れたヴィオロンをきかせる季だ…
「ヴェルレェヌよ
今年の秋も　めつきり老けた」と

あの虫が「古詩十九首」のなかでは
月のあたつた荒壁(あらかべ)のうらで　鳴く
――さむいほどだ　思つても　気がとほくなる
それが茫々たる　なん千年の疇昔(むかし)のこと
やつぱり詩人に
かうして老(ふ)けた秋を告げてゐたんだね　あいつは…

八十八夜

寝いり端(ばな)の小耳に
蚊ひとつ
ぷぅんと鳴きついて　哀(あは)れつぽく訴へでる

かた手間に　「歳時記」をのぞいてみる
「農家　耕ヲ首ム

立春ヨリ八十八日　マタ春霜ヲ置カズ
茶摘ミハ真盛リ　養蚕ハ初眠ノ頃」

ゆふ窓におく　手燭(てしよく)ほどの月あかり
そのなかに小粉団(こでまり)の匂ひ
または　むやみと
幟(のぼり)の滑車(せみ)の　から鳴り
遠音(とほね)に　きりり　近郊電車のせつかちな軋りかた…
ぱらぱらと　夜かぜがきて
卓子(テーブル)の辞書をめくる　すると「Candlemas」と出た

聖燭節　さうさう　二月二日
ちらちら　粉雪　しばたたく燭台の燭と
祈祷(いのり)のこゑと
それに（映写幕(エクラン)のうへの
マリア・シヤプドレエヌの雪）

それらがさつと掠めて　濾かに　夜冷えがくる
脳の芯に白つぽいものが　いつぱい

蚊の哀訴　それもすでに止んだ
ときあつて風がもつてくる
――夜学の※唔の尾が
ひとすぢ　微睡の耳にじやれつくだけ。

年の徂徠

いま燈火は、弱弱しげに、細まる。

乞丐のやうな十二月が
見窄らしく扉に衝つて、わが家の角を折れていつた。……二足、三足
そつと、闇のなかにと降りてゆく、年の背。
そのあとの空白を、粉雪が性急にやつてきて埋めつくす…

午前零時、たつたいま、
痩せこけた年の詩神は、息をひきとる。あゝ古ぼけた破れ帽子のやうな年が死んだ。
――偃鼠に似た、暗い憶ひ出と一緒に。

睡りかけた鳩時計が唄を歌ひだす、
ぽつぷう、ぽつぷう、ぽつぷう、
（それ「万有回帰」の軌道が軋つてゐる）

わたしは唐艸模様の外套を羽織つて、
それから、雪のなかへと索めに出る
やつてくる年の
――さりげない火種を秉りに。

海へ

海へ、一日。
しこたま夏の陽を仕入れて、日の暮れがたに還つてみると、わたしの生地の肌がかう呟くのだ。
「なんとよくもこれだけ掏(す)りかへられたものだ」と。

夜、絲爪棚のかげで一風呂浴びる。
すると、どうだ。現像液に涵した乾板のやうに、わたしの生地の部分が、みるみる泛びあがつてきた。

ブラウンと白とで出来あがつた、だんだらの斑(ふ)。この半白の「肉体写真」のうへで、一日の太陽の歩みを、——仮借なく灼きつける、その炎の歌を、まざまざと読みとることができる。
夜は夜で、この太陽の火傷(やけど)が、わたしをひと晩眠らせない。

河

石の橋　寒くゐんで

わたしは独語する、——おもひぞ屈する河」と

その河ふところ　煤けた没り日をば泛け
灰だみ　かき濁る　都会の河
逶※(ゐ)として眠る河
この河、ま二つにかきわけながら
このゆふべ
遠ざかつてゆく　ひとつの白亜の汽艇(ランチ)
（わが胸に消えてゆく　ひとつの思惟…）

石の橋　寒くゐんで
わたしは独語する、——河、わたしの内方(うちら)にも河がある」

からす

ラフカディオ・ハアンの「ほとけの畠の落穂」を眺める。その一節をわたしはノオトする

私が一個人――一個の魂！　いな、私は一つの群集である――幾万兆といふ考へも及ばぬほどの夥しい群集である。私は時代に時代を重ね、劫億に劫億を積んだものだ…

このくだりで、わたしはハアンのなかにじぶんを、またじぶんのなかにハアンを置いてみた。その空隙（すき）をふさぐ幾億兆の群集。――わたしは「ほとけの畠」の、あの目こぼれを啄む、一羽の禽に、どうやら肖（に）てきてゐる。しかも、零落（おちぶ）れた一羽のからすに。

孤　わけ入る山

やってくる男

あと一日の九月が　一瞬に
濁つた珈琲いろの雨の中に沈んだ
雨水の灌奠
沁みる

傘

軽尻（からしり）の性根を雨に洗つてゆかう
溝水のひびきは現象の悲鳴
けふ　わが卓子（てえぶる）のうへに
きのふの「歌」と「非情」と「凡心」の窒死…
暗闇から
初秋の傘の匂ひがジンと沁みる

重い感覚は　昨日の室に
あの鍵の音と倶におさらばとしよう
未来にかゝはりのない　生理は
一切合財　この傘の
あたらしい背を闇に飛ぶ　このしぶきであれ
まさに　現象の秤（はかり）のうへで
貪婪に
「今日」と「昨日」とが撓（しわ）つてゐる！

あたらしい傘
あたらしい雨
その一日の「夜」に約束される明日(あす)

九月の冷冷しい雨にぬれて
夕ぐれになれば
シュルレアリストZ・Iがやつてくる

独白

高祖保よ　おとがしてゐる　しづかな昏れのおりるおと

高祖保よ　この余(よ)の不幸はふたたび爾にいでて爾にかへらう

高祖保よ　おまへの耳が聴くのは「室内楽(カメラ・ムヴジカ)」だけだ　そとはかいくれ闇

高祖保よ　おまへの背ごしに　半円の月が淡すぎる……

高祖保よ　頭(づ)の鉢に植ゑるがいい　四季咲きの薔薇(うばら)一輪その匂ひがおまへの臭みを消す

高祖保よ　伐木丁丁　鳥鳴嚶々　春めいたな

高祖保よ　手をさしのべよ　やがて双手は十方無礙の大千世界をさす

高祖保よ　とんぼかへりしてみろ　下下(げげ)の天地へ　このとき還るのだ　なまなましい荒けづりの樸(ぼく)に

高祖保よ　にんげんに偃※(うふ)するより　ぞつこんおまへの精神に　それを！

高祖保よ　擦(おさ)へよ　揚るべからず　※(はか)つて　謫(しか)るべからず矣……

高祖保よ　モノクロオムを看るだけの目ならいらぬ　あの青黄繃(ほふつ)靡の観にあづかるがいい

高祖保よ　窓のそと　枯芝に日かげ　石に心　かぜ凪いだやうす

高祖保よ　すきな文句、——汎たるかの梢舟、汎としてそれ流る！

高祖保よ　蟻のかげだね　蟻のかげ

高祖保よ　遠近法（パアスペクティヴ）がくるつてるんでせう　その色盲　さしあたりこまりものだね

淡彩

1

ひと冬、咳きこんでゐた公園の噴水（ふきあげ）。いまは枯れがれにおとろへて、春の日ざしを浴びる。

そこから、なにの言葉も聴かれない。

噴水（ふきあげ）のうへを斜（はす）に、——鶺鴒まがひの痩せた小禽がひとつ、青磁いろの一線を曳いて、さむ

くおちていつた。なにの言葉ものこらない。なにの囁きすらも。——去つてゆく冬の使節、いまはこゑを嚥む歟と。…

2

並木路は、まだ芽ぶかぬ白楊。

その首のめぐりはいつせいに痩せて、ほんのちよつぴり、冬の襟巻に肖た雲の片はしをまとつてゐるといふだけ。この灰いろの襟巻。ふゆの遺産。——そこに、まだ春のことぶれはとほい。道ゆく犬も、子供を載せた乳母車も、その乳母車ひく母親も、われとわが影を踏んで、あるいてゆく…

3

廃館になつた領事館のまへで折れて、海へおちる道。——あをく摺まれた海の夢が、とほい※を乗せて万里の潮を、しろくあげてゐる。

ゆふぐれを背負つて、その坂のうへから自転車に跨つた、臙脂いろのワン・ピイス・ドレスのをんなひとり、身をひるがへすやうにおりてくる。——おりてくる自転車。跨つたものは、

すでに一個の、無心の物体である。もし、さうでないとするなら、あれは、冬の石女（うまずめ）にちがひない。

4

ヒマラヤ杉のうへに、日ざし弱い、ま昼の太陽がやすんでゐる。雀一羽すら、そこへはやつてこない。おしだまつて、ものに倦（う）んじた時のながれが、目にみえぬ迅（はや）さで、※（に）げてゆくだけである。

ヒマラヤ杉の下のベンチ。目なれた浮浪者のかげすら、そこへやつてこない。気おちした、老人の精神が、トゥルゲーニエフの散文詩ふうの外套をまとつて、そこに腰をおろしてゐるだけである。――全く、まつたく、それは、わたしが置きわすれた詩の、うらぶれた　残像（アフター・イメエヂ）のすがたであると、告げたい。

「孤　わけ入る山」

四月十四日

元住吉の野なか、車中からわたしは一羽の鵠をみとめた。痩身長脚、羽根は霜を浴びたほどに白い。――亭い野の欅にとまるとき、それは樹をひきたたせる頭飾となつた。中空に漂うて、それは一点の白、高雅なアトムを撒きちらしてゐた。（いちど「静」のなかで羽根を憩うた、あの「動」の相で…）

四月二十一日

田中冬二さんより来翰。

麦の穂擦れの風が、海のやうにきこえるとあり、また日の暮れがたは、遠蛙がきこえるとも書かれてゐる。

四月二十四日

わたしの詩集に、荘厳といつたものは需めまい。同時に綺羅をも。よしんば需めるとして、あの晩ざくらの群落の、――なにかかう火山灰に似た、白いうす濁りが漂つてをればよい。

五月八日

「詩経」をのぞく。太古にあつても、やはり昆虫は季節の指針をなして、月のうつりを象徴してゐたらしい。

五月、斯螽股を鳴らし。六月、莎鶏羽を振ふ。七月、野に在り。八月、宇に在り。九月、戸に在り。十月、蟋蟀わが牀の下に入る

襟すぢがへんに寒い。ひる寝のなかで、牀の下からやつてきた蟋蟀の、ながい脚に、踏んづけられた夢をみて、さめる。

多喜氏から「近江だるま」が届く。

五月十八日

五月どきの蕭やかさのなかで、あの層のふかい、漆黒の闇の肌ざはりがしたしまれる。いはく、闇中孤坐。……そのなかへ、いつぽんの蝋燭を樹てる。蝋燭の※がけぶる。まてまてけぶるのは灶でなくて、わたしの孤独でこそあらう。孤独の思量。

（孤独は、ちやうど燃えおちた灶から翔びたつ、孩な灯取虫のごときものであらう）

台湾へおくるための、詩一篇。

ぽつんと紙へ題だけ落として、筆を剪る。

――「孤※(こまよう)わけ入る山」

七月

アスパラガスが、黄いろい紙屑ほどの花をつけた。その隣りあひに姫胡蝶花(ひめしやが)が花をひらいた。それに連ねて、山百合も一輪。そのとなりに淡くれなゐの四季咲き薔薇が、ほんのちよつぴり、これも花をつけてみせた。

そのとなりに、おおそれらを培うた張本人が、傲岸に、けさそれらを見おろして立つた。それがそれ、――わたしだ。

六月

夜つぴて雨ふる。雨のあひま、川のはうへおりてゆくと、夜振(よぶり)の灯がみえる。

夜振の灯。

樹の下

わたしの詩集に、この句を入れることにきめる。
題は「樹の下」――

涼しさや　松の落葉を　つんでゐる

冬蝶

あれ　GOIDZUKI《ゴイズキ》のさきの　冬ざれの花、一輪

＊GOIDZUKI　木製雪掻き（彦根）

草店月初冷

あはれなるかな
　わが　咳嗽のかげ
淡月に霧らへり、さあれ
　岸の、草廬
　軒の吊り燈籠のうへ　湖なみの
　　白じらとかかり…

くれなゐ

目覚めると、庭芝のうへ、やはらかな雨が降りてゐる。目にしみる、いろどり。睡つてゐる芝艸。——みてゐると、ぽたり、それへ凌霄かづらの花がこぼれおちた。緑中一点紅。（これで何がな、風景に彩が生じた）だが、芝艸の睡りはさめるとしもない。

呂律

ふるい革袋に　あたらしい酒
あたらしい革袋に　ふるい酒

あるひは　古い革袋にふるい酒
あるひは　あたらしい革袋に　あたらしい酒

「落葉哀蝉曲」を読む人

五月四日

蠅をたべた夢をみる。

満身創痍、凍夜の野に、山のやうな蠅に埋れながら。——だが、濠洲の神話にでる Mangark unyerkunya といふ神さまは、生のまんま、蠅といふ悪魔の子を召しあがるとのこと。（よし

この故事(ふるごと)が、へんな夢を、訳ありげに粉飾させてもよんどころないことだ。……）

五月五日

澄んだ机のうへに、古備前の壺が一個。

これは父の遺品である。そこに「落葉哀蝉曲」をよむひとがゐる。

…虚房冷而寂寞。落葉依于重扃。

支那の落葉。歳老いた武帝。淡い夢のほとぼりが、そこから、薫ずるやうにたち昇る。

九月八日

わたしは、この雑駁な、とりとめのない日記をつけることに、堪へがたいまでに心を訶(さいな)まれてゐるやうだ。むしろ、この内部的感情の閙ぎが、筆を抛つことを拒んでゐるのだともいえる。

不潔な精神界の泥沼。

十一月三日

児が泣きだす。強靱な生誕第一声。

コクトオ流にいへば、空間をかきむしり、眼にみえぬなにかを　りとりながら。

十二月一日

眺めてゐる。たとへば、ピアノのうへで、隻脚を振つてゐるメトロノオム。その律気な退屈さが、たまらなく、わたしの平和を揺さぶるのだ。（死んだもおなじい、温室咲きのやうな平和を。）

このとき、素迅くつぎの一句が、わたしの双のたなぞこにのこる。ストイックふうのひびきをたてながら。わたしは、まさしく不意を衝かれた。

力を尽して窄き門より入れ…

和蘭陀石竹のかげに

一　ペン

ペンをとらなければならない。ささくれたペンを。孤独がわたしに命じた。書け、と。あの五月の闇の蕭やかさのなかで書いた、いくつかのもの欲しげな、独居の詩。辛うじて、それでも書きとめてきたのだ。わたしは。――「天使園の薔薇」だの「乖離」、「哀訴」だの、それに、「Sine qua non」だのと。

（しかしそれらの中に沈んでゐるのは、孤独の滓ではない。ひどく華やいだ、むしろ孤独怡悦の神の、――隠微な擬態だつたやうだ）孤独よ、これは宥せ。

二　検索

かりに額に掌をさしあてて、呟いてみた。

…「百舎重※して来る」

すると孤独は、そのやうに、遠方にあると思はれもする。孤独は鹹つぱくて、岩塩かなんぞのやうに手荒くある。実験室の甘汞よりも、もつと白いものであるかもしれぬ。――ゆふぐれの中で、求道者の匂ひの漂ふ、和蘭陀石竹。翳つた邈漠たる、その色。そこらあたりに、ひよつこりゑんでゐるのかもしれない。孤独は。

※ひに、詩のなかに姿をおとすときは、はなはだ書割のとぼしい、間遠な姿の、うそ寒いものばかり。わたしの孤独よ。（おまへはそれに似てゐる）

三　烟草のから

水に涵つた桃林を、人は雨外套の襟をたてて足ばやに、暗いはうへ消えていつた。

その後姿に、薫ゆらすとみえた、紫煙のけむの一片。それが白い。ぽんと、抛げすてられたその殻。地におちて、なほ燻る余燼。――もはや夜の大地が、こんな小つぽけな烟草を薫ゆらせてゐると、みえないことはない。

青空文庫情報

底本：「高祖保詩集」現代詩文庫、思潮社
1988（昭和63）年12月20日初版第1刷
初出：「雪」文芸汎論社
1942（昭和17）年5月4日
※一部の拗音、促音が小書きされているのは底本通りです。
入力：浜野智
校正：八巻美恵
2014年5月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪

高祖保

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/